

中国の民族主義者に嫁した日本人女性とマラヤ

原 不二夫

はじめに

20世紀初頭から前半にかけて、中国の民族主義者が多数日本に亡命したり留学したり支持者を求めたりした。これらの人々の何人かは日本人女性と結婚した。郭沫若や、同列に論ずるのは適切でないかも知れないが陳儀などのことはかなりよく知られている。ここでは、そうした帰国後もっぱら中国国内で運動に携わった人々のことでなく、主に今回の出張旅行（2008年2月）で入手した資料・知り得た情報を基に、マラヤ（現在のマレーシア）に渡った、あるいはマラヤに生まれた、この時代の民族運動の指導者のことについて、というよりそのような人々に嫁いで夫の運動を陰で支えた日本人女性について述べたい。

1. 鍾卓京と渡辺美子夫人

鍾卓京は康有為と同じく広東省南海出身で、1902～03年には孫文や梁啓超の働きかけで1900年に神戸に設立された「同文学校」の校長を、1904～07年には同じく孫、梁の主導で1898年に横浜に設立されていた「大同学校」の校長を務めた。1907年には夫人の渡辺美子とともにマレーシアのクアラルンプールに渡り、翌08年から13年まで「尊孔学校」(Sekolah Confucian)の校長を務め、近代華僑教育の発展と普及に重要な貢献を果たした。「尊孔」とは、「孔子を尊ぶ」の意味である。同校は1906年に、清朝政府に南洋各地視察のため派遣された劉士驥の呼びかけに応じて陸佑 (Loke Yew. 1846-1917) らクアラルンプールの有力華僑が、「教育救国、文化興邦、啓発民智、培養人材」を目的に設立した。08年から夫人も教壇に立った。

美子夫人は当初から女学校設立の必要性を熱心に説き、夫や、地元の民族運動指導者として知られる張郁才 (Cheong Yoke Choy. 1870-1958) らの協力を得て、同じ1908年に「坤成女校」(Sekolah Perempuan Kuen Cheng) を創設した。鍾が同校でも16年まで校長の任に就き、夫人は同校で芸術も教えたという¹⁾。

夫人がいつまで両校で教鞭をとったかは、分らない。夫人の経歴は不明で、夫妻が知り合って結婚したのは恐らく日本においてだろうが、その間の消息について触れた資料もない。どこで亡くなったのかも知られていない。両校は今もマレーシアの名門華文学校として知られるが、以前坤成に聴き取りに行ったところ、美子夫人を知る人

は誰もおらず、彼女に関する資料もなく、空しい思いで帰ってきたことがある。

2. 呉世栄と未婚の妻

呉世栄（Goh Say Eng. 1875-1945. 7）は、ペナン生まれの福建華僑で、孫文が1906年にペナンに来て結成した中国同盟会ペナン分会の分会長となり、以後も孫文の革命運動を様々な形で支援し、中華民国建国直後の1912年2月に上海で結成された初の華僑国際組織「華僑連合会」においては、汪精衛（汪兆銘。1883-1944）会長の下で副会長に就任した。続く時代には抗日運動を指導した。しかし、こうした運動に全財産をつぎ込んだため父親から引き継いだ家業は破綻し、32年から開戦の41年までは中国政府から生活補助を受けることになった。

この呉世栄が、若い頃ペナン在住の日本人女性と知り合い子供までもうけたが、結婚は家族の承認を得られず、呉は泣く泣く母子に生活費を渡して日本に送り返した。以後全く消息がつかめなかったが、先次大戦で日本がペナンを占領したあと、一人の日本軍人が呉のみすぼらしい家の前に立ち、「呉世栄先生はどなたですか」と訊いた。呉が「私だが」と答えると青年はぱっと敬礼して「母が臨終の際、お前の父親はペナンの呉世栄先生だ。機会があったら必ずペナンに行って会いなさい。お父さんは私達母子の面倒をととてもよく見てくれました、と言っていました」と話した。青年はその後も折に触れて食糧などを持って呉を訪ねその生活を支えたが、間もなく他所に転属となった。呉自身も、日本軍降伏のわずか1ヶ月前に病没した²⁾。

このことはペナン中に知れ渡ったが、呉がそのために非難を受けることはなかった。今もマレーシアの華人社会では、呉の愛国運動（戦前は、今日と違って「愛国」とは中国に対する「愛」を意味した）指導者としての高い評価に変わりはなく、2007年10月にペナンに開設された「孫中山先生博物館」（孫中山とは孫文のこと。孫文、呉らが啓蒙活動のために1908年に建てた「閲書報社」を衣替えした）の前庭にも、孫文を中に、呉とその盟友・黄金慶（Ng Kim Keng）の3人の立像が建てられている。

大分以前に読んだ、戦時中に出版された戦記物のなかにも、この邂逅を感動を込めて書いたものがあつたが、残念ながらもうどこに行ったか分からない。悲しくも添い遂げられなかった日本人女性の名も、その息子の名も、今はとばりの彼方にある。

3. 黄伯才と第2夫人

黄伯才（Wong Pak Choy. 1880-1940）は、広東省東莞陽明生れの客家で、11歳のとき母についてクアラランプールに渡り、父親の働く錫鉱山で一緒に働いた。刻苦奮励して自らの錫鉱山を持つとともに、1930年代には抗日救国運動の先頭に立った。上述

の張郁才らとともにマラヤ、香港、インドネシアの惠州出身華僑青年を結集して「東江華僑回国服務団」を組織し郷里の抗日戦に送り込んだことなど、マレーシアの華人社会で今日も高く評価されている³⁾。

「東江華僑回国服務団」が中国共産党に近い組織だったこともあり、黄は中国国内でも賞讃されている⁴⁾。

マラヤの華人与党・マラヤ華人公会（のち、マレーシア華人公会）創設者の一人で独立マラヤ最初の大蔵大臣を務めた李孝式（Tun Sir H. S. Lee. 1901-1988）に関連する膨大な資料は今その長男の事務所で整理が進められているが、その中に次のような文書がある。李と黄とはともに戦前クアラルンプールの抗日運動指導者だった。文書⁵⁾とは、1953年4月に、李が黄の第2夫人に遺産相続を認めるよう、イギリス駐マラヤ連邦高等弁務官に提出した請願書と、それに対する植民地当局側の回答である。そこには、次のようなことが記されている。

黄伯才の第2夫人は「やすの ちよき」という日本人である。彼女は1920年にマラヤに来て26年にクアラルンプールで黄と結婚し中国臣民（Chinese subject）となった。41年3月に孫（ママ）と一緒に休暇で日本に行ったが、太平洋戦争勃発で53年1月までマラヤに帰れなかった。彼女は黄の3人の合法的な妻の1人として黄の農園の9分の1を相続する権利があるはずなのに、敵国人扱いされてこの農園を敵産管財人（Custodian of Enemy Property）に取り上げられてしまった。彼女は敵でも敵国臣民でもないのだから、持分を回復させるべきである。彼女は今や年老いて、亡夫の残した農園に頼るしかない。情けあるご配慮をお願いする。

これに対する植民地司法当局の回答は、彼女は明らかな敵であるとして請願をはねつけるものだった。

やすの夫人がこの後どのような生活を送ったか分らない。日本人としての立場と抗日運動指導者の妻としての立場は、さぞかし辛いことが多かったろう。黄については略伝は多いが本格的な伝記は寡聞にして知らない。略伝には、日本人の夫人がいたことは一切出てこない。

4. 黄興と謎の日本人夫人とその娘

黄興（1874-1916）は、孫文の盟友として余りにも有名である。Web-siteの「新浪読書」によれば、黄興は19歳の時両親の決めた女性と結婚して5人の子供を、辛亥革命

前期に「辛亥革命女傑」徐宗漢と結婚して2人の子供をもうけた。徐は1907年にペナンで同盟会に参加して以来革命の道を進み、黄花崗蜂起で負傷した黄を手当てしたのが縁で結婚した。黄には他にもう1人、黄文華という娘がいて、黄文山と結婚した。文華は北京大学を卒業してコロンビア大学に留学し、中央大学、ニューヨーク社会科学学院、中山大學で教鞭を執った⁶⁾。

革命の指導者とペナンの華僑女性との結婚は汪精衛と陳璧君(1891-1959)の場合とよく似ているが、ここではその点には触れない。関心があるのは黄文華である。劉強倫『百年家族——黄興』（河北教育出版社、2006年）という本の第12章3節は「不知其詳の黄文華和李雄，李強」（詳細不明の黄文華および李雄，李強）だという⁷⁾。彼女の来歴はまだよく知られていないらしい。ところが、最近マレーシアの左翼運動研究者が、同国ペラ州パンタイ・レミス(Pantai Remis)で彼女と数十年来の友人だったという女性に出会った。この女性は、彼女の墓に案内するとともにその生涯について語ってくれたという。以下は、そのあらましである。

黄興は日本で1人の日本人女性（東瀛姑娘）にめぐり逢い、黄文華という女の子が生まれた。墓に刻まれている「黄文子」は、日中混血の彼女の本名である。墓碑には、「元配夫黄文山教授（旅美）立」（アメリカ在留のもと夫・黄文山教授建之）とある。黄興は早くに養子を取って黄文山と名づけて可愛がり、アメリカに留学させた。卒業後サンフランシスコの大学で教授となり、黄興の意向で黄文華と結婚した。結婚後文華はアメリカで勉強を続けたが、同じくアメリカに留学していたタイの富商の息子・黄達之と知り合い、シンガポールに駆け落ちした。黄達之は1930年代にジョホール州バト・パハ(Batu Pahat)の華僑中学で教鞭を執り、英語に堪能だった。抗日戦勝利後マラヤ共産党に入党し、ジョホール・バルーに住んでインドネシアとの取引に携わる傍ら、シンガポールに印刷所を設けて共産党の地下文書を印刷した。中国民主同盟ジョホール支部主任も務めた。1948年6月に始まった抗英武装闘争に参加、49年前半に英軍の待ち伏せ攻撃にあって犠牲となった。文華はその頃半公開の地下工作に従事していたが、戦友たちの助けでそこを逃れて各地を転々、最後はパンタイ・レミスに落ち着いた。文華は、黄文山が1964年に香港の大学に招聘されたことを新聞報道で知り、香港に赴いて3年間ともに暮らした。76年にマラヤに戻り、78年に病没した。文山は元妻を深く愛しており、サンフランシスコにその名をとって私立学校「黄文華学院」を建てた⁸⁾。

黄文山については、『世界華僑華人詞典』の黄文山(1897-1982)⁹⁾とやや違うところがあるが、アメリカ、香港で教鞭を執った点では共通しているし、別名・凌霜が同じ

なので、同一人物であることは間違いない。但し、『詞典』には養父のことや妻のことは何も触れられていない。文華の略歴は、どうも先述の「新浪読書」のそれとは違和感がある。もっとも、「中山大学で教鞭」は戦後文山と再会してからのことと考えれば一致するのも知れない。

黄達之は、筆者がかつて調べたところでは、中国民主同盟マラヤ支部ジョホール分部（1947年3月29日設立）の2代目の主任だった。初代主任の実業家・戴子良（1891-1951）が48年に中国に帰った後を継いだのである¹⁰。しかし、それ以上の経歴は分らなかった。民主同盟マラヤ支部、各州分部主任のほとんどは、胡愈之（1896-1986）マラヤ支部主任を筆頭に中国に帰っており、マラヤのゲリラ戦で死亡したのは黄達之のみである。

残念ながら、文華の日本人の母については、何の資料もない。

おわりに

これまでに分ったことを整理しただけの文章に過ぎないけれど、20世紀の初めから終わりまで、日本と中国とマラヤ（マレーシア）の間で織り成された波乱の歴史を背景に、日本人女性、あるいはその血を引く人々が懸命に生きた足跡が、ほんやりとにせよ浮かび上がってきたように思う。老骨の探索はこの辺が限界で、どなたか若い人がこうした人々の足跡を引き続き追って下されば、老骨の喜びは計り知れない。

注

- 1) この項、ここまでは、李芳鈞主編『百年尊孔人与事』Kuala Lumpur, Confucian Private Secondary School, 2007年、特に万家安「尊孔開弁初期校長鍾卓京」(pp. 36-39)、および林有慮編『馬來西亞全国華校發展概況・第二部増訂本（第六部）』, Penang, 五洲柯式電版有限公司, 1992年, pp. D135-140を中心にまとめた。
- 2) この項、ここまでは、馮仲漢主編『居安思危：大戦前後新馬史料匯編』Singapore, 亜太図書有限公司, pp. 234-236。および、周南京主編『世界華僑華人詞典』北京, 北京大学出版社, 1993年, pp. 383, 384。「呉世榮」の項を中心にまとめた。
- 3) この項、ここまでは、雪隆広東会館『雪隆広東会館六十週年紀念特刊（1939-1999）』Kuala Lumpur, 雪隆広東会館, 2002年, pp. 290, 291を中心にまとめた。
- 4) 黄焯然「帰国抗日紀実」, 中国人民政治協商會議全国委員会文史資料研究委員会編『文史資料選輯』第3輯, 北京, 文史資料出版社, 1985年, pp. 23-43。
- 5) HS Lee Files, *Correspondence 1948-1955*. "Attorney-General's Chambers, Federation of Malaya, Kuala Lumpur," dated 21st May 1953.
- 6) http://vip.book.sina.com.cn/book/chapter_40081_25628.html (2008年3月3日検索)。
- 7) <http://www.1000book.com/product.asp?id=150527> (2008年3月5日検索)

中国の民族主義者に嫁した日本人女性とマラヤ（原不二夫）

- 8) 万家安 『与歴史対話(二)戦後馬共策略的探討』 Kajang, Malaysia, 当代本土史料研究室, 2008年, pp. 173-177.
- 9) 周南京主編 前掲書, p. 710.
- 10) 原不二夫 『マラヤ華僑と中国』 龍溪書舎, 2001年, pp. 276, 277, 488, 489.